

讃岐国府跡探索事業調査報告

平成 25 年度

新宮古墳・醍醐 3 号墳の確認調査

2014.2

香川県埋蔵文化財センター

例言

1. 本書は、香川県埋蔵文化財センターが平成21年度より実施している讃岐国府跡探索事業のうち、平成25年度に実施した新宮古墳及びその周辺の関連遺跡調査についての報告書である。
2. 調査を実施するに当って、下記の機関等の協力を得た。記して謝意を表したい(順不同、敬称略)。
大久保徹也 大野忠徳 坂出市府中町地元自治会 坂出市教育委員会
3. 本書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施し、信里芳紀が執筆及び編集を行った。
4. 調査に参加した讃岐国府跡ボランティアは、以下のとおりである。
安藤みどり 池浦健一 岩崎良則 垣本 保 梶 英憲 金倉留美子 葛原知子 久保正志 合田武勝 甲野 博 齋藤茂 坂下周市 佐々木方彦 住谷善慎 十河裕之 高橋利秋 高橋 徳 田村源一 長谷川宏 藤岡 貴 藤田和康 古田博子 水谷耕造 宮本義彦 森野雅雄 和田昭

目次

第1章 調査の経緯と経過	2
第2章 歴史的環境	2
第3章 新宮古墳の調査	4
第4章 醍醐3号墳の調査	15
第5章 綾北平野の横穴式石室墳の基礎資料	30
第6章 綾北平野の大型横穴式石室墳の築造年代とその評価	41

挿図目次

図1 讃岐地域の巨石墳の分布	図17 美道部・前庭部出土須恵器
図2 綾北平野の主要遺跡分布	図18 穴窯部(被織塚)古墳墳丘測量図
図3 墳丘測量図	図19 穴窯部(被織塚)古墳石室平面・壁面
図4 墳丘復元図	図20 仏願1号墳丘測量図
図5 横穴式石室平面・壁面	図21 仏願1号墳石室平面・壁面
図6 横穴式石室平面・断面	図22 仏願1号墳出土遺物1
図7 前庭部出土須恵器	図23 仏願1号墳出土遺物2
図8 醍醐古墳群分布	図24 仏願1号墳出土遺物3
図9 墳丘測量図	図25 仏願2号墳丘測量図
図10 トレンチ配置	図26 仏願2号墳石室平面・壁面
図11 トレンチ平面	図27 仏坂古墳出土遺物
図12 トレンチ断面	図28 玄門立柱構造の大型横穴式石室の変遷 (母神山・大野原古墳群)
図13 列石3立面・列石4平面・断面	図29 玄門立柱構造の大型横穴式石室の変遷(綾北古墳群)
図14 墳丘復元図	図30 母神山鐘子塚古墳出土須恵器1
図15 横穴式石室平面・壁面	図31 母神山鐘子塚古墳出土須恵器2
図16 横穴式石室平面・断面	

※地図は国土地理院地形図を使用しました。

第1章 調査の経緯と経過

平成21年度から開始した讃岐国府跡探索事業では、讃岐国府跡の発掘調査と並行して、国府周辺の地理的・歴史的環境を明らかにすることを目的とした地名・地形等の調査を実施してきた(香川県埋文セ2011.2013)。平成24年度からは、讃岐国府設置に係る歴史的な経緯を明らかにすることを目的に、国府周辺に多く分布する大型横穴式石室墳の測量調査を開始した。平成24年度は、穴薬師(綾織塚)古墳の測量調査を実施しており、その成果は既に報告済である(香川県埋文セ2013)。平成25年度は、新宮古墳を調査対象とするとともに、過去に確認調査が実施されている醍醐3号墳の再整理を行い、合わせて調査報告書を刊行する運びとなった。また、坂出市教育委員会によって発掘調査が行われた仏願1・2号墳の測量図や出土遺物を掲載することにより、讃岐国府周辺の横穴式石室墳の全体の様相の把握に努めることとした。

新宮古墳の確認調査は、平成25年9月30日に開始し、11月2日に地元対象の説明会を行った後、現地を撤収した。また、新宮古墳の測量調査は、讃岐国府跡ボランティアの参加を得て実施している。醍醐3号墳については概要報告書(廣瀬編1986)が既に刊行されているが、調査時に作成した石室・トレンチ実測図の未公表データについて再整理を行った。仏願1・2号墳については、坂出市教育委員会の協力を得て、調査原因の提供を受けるとともに坂出市郷土資料館に保管されている出土遺物の図化を行った。

第2章 歴史的環境

香川県中部の綾川下流域、通称「綾北平野」には、横穴式石室を内部主体とする後期から終末期古墳が多く分布している(図2)。この綾北平野は、南北約5km、東西約1~2.5kmの小さな谷底平野であり、中央から河口部には明瞭な条里型地割が遺存している。綾川右岸側の穴薬師(綾織塚)古墳を頂点とする加茂古墳群、左岸側の醍醐1~37号墳を主体とした醍醐古墳群を中心に、その周辺に北山古墳群や極端な群集傾向を採らない小規模な横穴式石室墳が点在している。新宮古墳、穴薬師(綾織塚)古墳、醍醐1~37号墳は、玄門立柱構造をもち、玄室床面積が11㎡を超える大型横穴式石室墳、所謂「巨石墳」であり、石室型式などからTK43型式末期からTK209型式併行期に築造されたものと推定できる(大久保2009)。これらは、TK209型式併行期の築造停止後、TK217型



図1 讃岐地域の巨石墳の分布

式併行期まで追跡期間を想定できるが、それと併行、あるいはその直後には城山山頂に古代山城である城山城が築城されている。城山城は、外郭土塁と内郭土塁による複郭構造の古代山城であり、内部構造は不明ながらも約4.2kmに及ぶ広大な城壁が廻る古代山城である。城山城の築城の年代は不明だが、同じ讃岐地域の屋嶋城の年代観と同様に推定すれば、8世紀初頭段階には廃城となっていたと考えられる。それと同時に、平野最奥部に讃岐国府が設置された可能性が高く、両者は何らかの関係があるとみられる。また、開法寺、鶴鹿寺、醍醐寺等の古代寺院もこの頃に建立された可能性が高い。

以上のように、綾北平野における6世紀末葉から8世紀初頭にかけての期間は、相次いで記念物が造営され続けている。これらの造営主体や相互の系譜関係は単一であるとは考えられないが、広大な面積をもたない綾北平野に集中する記念物群の動向は、讃岐国府がこの地に設置された歴史的経緯を考える際に有力な資料になると考えられる。本報告書で説明を加える横穴式石室墳の動向は、その序章に位置付けられるものである。



写真1 綾北平野を南から望む

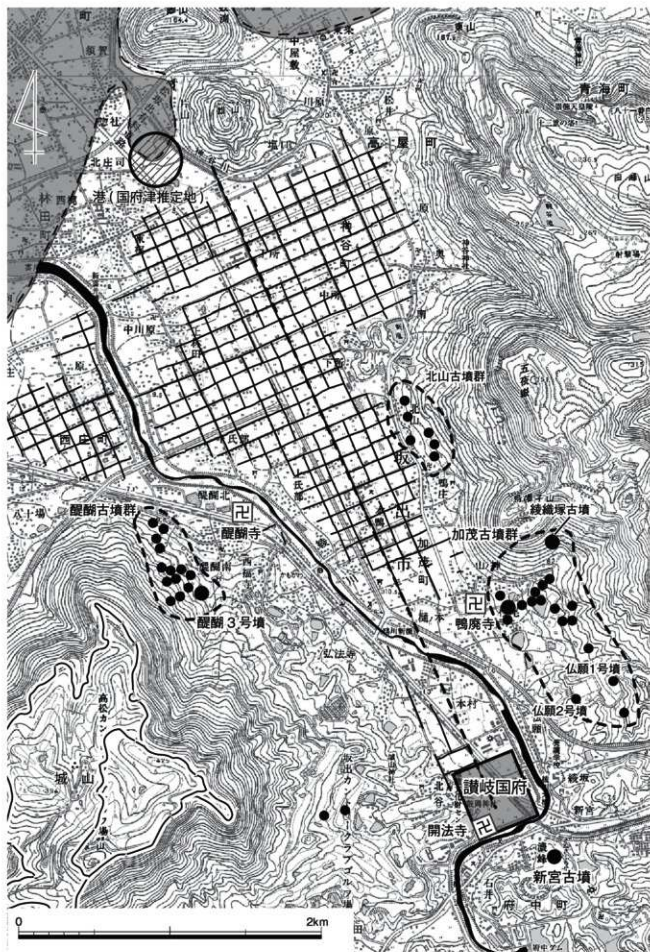


図2 綾北平野の主要遺跡分布

第3章 新宮古墳の調査

1. 新宮古墳の立地と既往の調査

新宮古墳は、綾北平野の南部に位置し、南方の丘陵から北へ派生した標高約30mの尾根上に築造されている。同一の尾根の南東側約200mには小規模な横穴式石室をもつ仏坂古墳、谷筋を挟んだ約300m東側の尾根上の果樹園には新宮東古墳が存在したとされるが、現状では明らかではない。これら2基の横穴式石室墳の詳細は不明であるが、加茂古墳群や醍醐古墳群のような群集傾向は採らない。

墳丘は北側の先端部から約20m南へ離れた位置に築造されており、尾根の幅一杯に墳丘を乗せている。現状で墓地造成や砕石事業に伴い、丘陵・尾根の改変が進んでいるが、墳丘南部の「忠魂堂」と呼ばれる建造物を境にした南側は、元来急傾斜の丘陵となっていたようであり、墳丘は傾斜変換点付近に設けられていると考えられる。後期古墳や終末期古墳に多くみられる所謂「山寄せ」の立地ではない。

横穴式石室の開口方向は西側であり、その延長線上には城山城明神原がある。北側の綾北平野全域を見渡す方位は採らない。

新宮古墳における既往の発掘調査は、昭和32年の川畑迪氏により前庭部での発掘調査が行われており、その際のデータや出土した須恵器につ

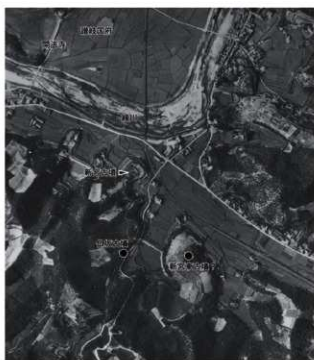


写真2 新宮古墳の立地



写真3 新宮古墳の全景 西から

いては一部公表されている(坂出市史編纂委員会1988, 川畑・渡部2008)。今回の調査成果報告書の刊行に際して、坂出市郷土資料館に保管されている川畑氏の調査ファイルを確認した上で、調査区位置や遺物出土位置について復元を試みた。横穴式石室の実測図や形態的な特徴について論じたものとして、山崎信二氏や大久保徹也氏による研究が挙げられる(山崎1985, 大久保2008)。また、出土遺物の一部については、府中町所在の鼓岡神社に保管されている。(香川県埋文セ2010)。これらの先行研究についても、適宜触れながら記述を進めることとする。

2. 墳丘の所見(図3)

測量調査は、最小限度の樹木の伐採と落葉を除去したのち標高測量を行った。また、標高測量にはトータルステーションを使用し、そのデータから図化ソフト上で等高線が発生させた。測量端点は、50cm四方を基準として配置したが、現況に明確な変化点が観察される場合は補正を行った。

現況で墳丘西側から北側へ小径が走り、北側の尾根上は墳丘を一部削り込むように墓地造成が行われている。墳丘南側は、昭和3年の「忠魂堂」の建築に伴って平坦面が造成されている。墳丘西側は、畑地造成に伴い広範囲に平坦化され、墳丘東側の尾根斜面は墓地造成によって急峻な斜面



写真4 石室全景 西から

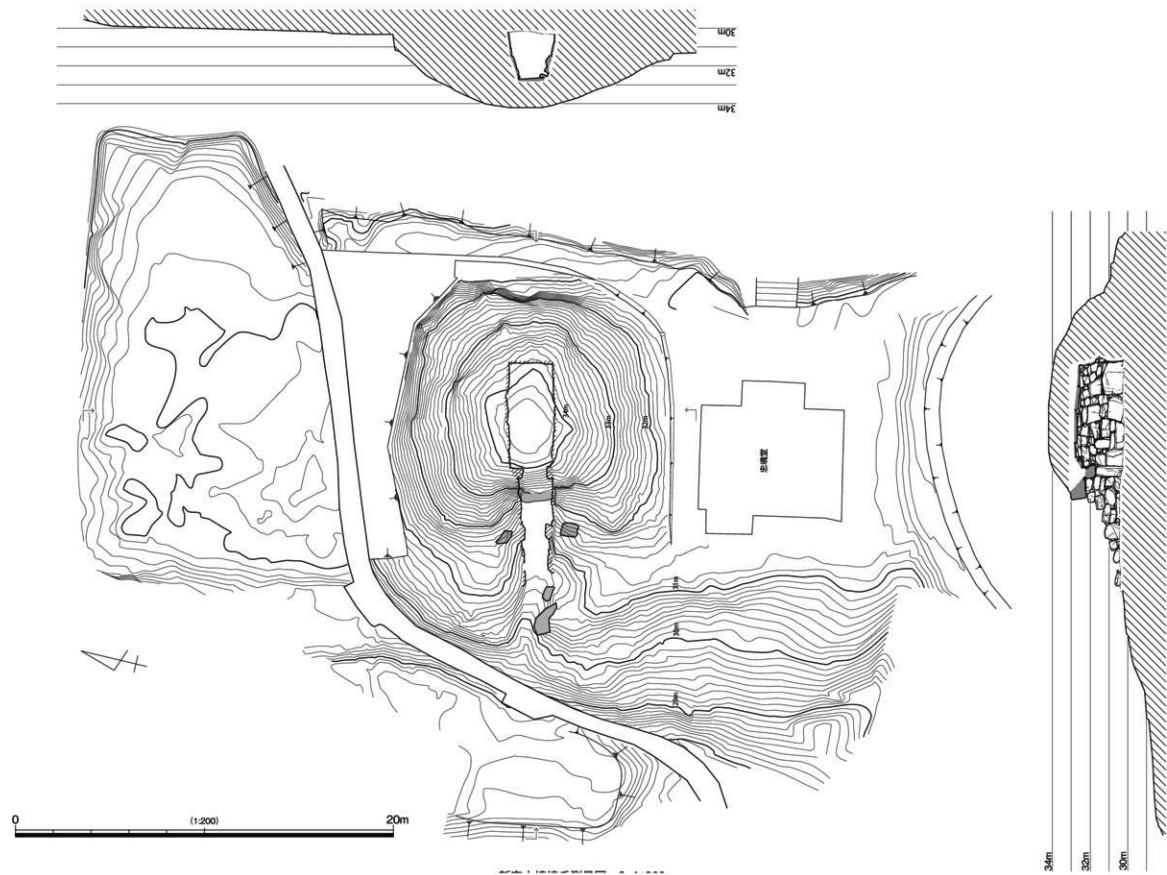


图3 填丘测量图



写真5 墳丘の現況 北から

に改変されている。以上のように、周辺の残存状況は良好ではないが、現況や横穴式石室の床面レベルを参考にして、墳丘規模・形態を推定していきたい。

墳頂部は、玄室位置に対応するように標高34mの等高線に示される約5m四方の範囲で平坦面が観察できる。玄室天井石の厚みを約50cmと仮定した場合には約1mの封土が残存していると考えられる。当該期の横穴式石室墳の標準的な盛土高は明らかではないけれども、墳頂部には一定量も盛土が残存しているとみてよいだろう。

墳丘北側は、墓地造成に伴い大きく改変を受けている。この改変に伴い、墳裾のみならず墳丘上位も一定の削平を受けたように、墓地の境界構造物のコンクリートに沿う形で多角形状に等高線が変化する状況が観察できる。小径を挟み北側にも墓地造成が及ぶが、現況から周溝を想定できる等高線の状態はみられない。墳丘北側においては、墳形・規模を推定する材料は乏しいといえよう。

墳丘南側は、等高線が整った形で現われる。玄室の左側壁のラインに並行するように標高32～33mの等高線が直線状態でみられ、南東隅では玄室南東隅のコーナーに合わせて北側へ折り返す状況が確認できる。墳丘北側と比較して、南側の遺存状況は良好である。現状での墳裾部には、「忠魂堂」との境に高さ約0.5mの石垣が敷設されているが、玄室床面のレベルを考慮すると、墳裾はこの石垣より2m程度南へ延びるものと想定できる。

墳丘東側は現状での墳裾に接して墓地が設けられており、小径を挟んだ尾根東斜面は急角度に改変されている。玄室奥壁上部の墳頂部付近の等高線と比べ、標高32m以下のそれは間隔が密となっており、墓地造成に伴い墳丘が削平を受けていると判断できる。尾根東側斜面も急角度に改変されているが、玄室南東隅部の延長上の尾根の斜面が、一部西側へ巻き込む箇所があることは注意される。この部分は「忠魂堂」への参道の石段が敷設



写真6 墳丘の現況 南東から

されていることも考慮しなければならないが、玄室南東隅部の延長線上に位置することと、玄室床面のレベルから想定した墳丘南側の墳裾推定ラインの延長線上にあることから、墳丘裾(隅部)を反映する可能性がある。

石室開口部である墳丘西側は、尾根線の旧状を留める箇所が多くみられる。特に「忠魂堂」の西側でやや広い間隔で併走する等高線は、一定程度、尾根斜面の旧状を反映しているとみてよいだろう。それと比較して、石室開口部付近を中心に標高31～29mの等高線が西側へ張り出すような状態がみられる。前室から羨道部にかけての天井石が失われていることから、石材の抜き取り・移動に伴い墳丘盛土が二次的に堆積した可能性も考えられる。しかし、その一方でこの張り出し部分における等高線の状況は、墳丘南側の等高線に合致した状態でみられることから、一定程度の墳丘形状を反映していると考えたい。前室・羨道部の側壁の石材のレベルから推定して、床面を現況より約50cm下と仮定した場合には標高30m付近が墳裾の候補となる。

また、石室羨道部の石材が途切れる南北両サイドには平坦面が観察される。南側は「忠魂堂」へ取り付く道と重複しているが、北側の平坦面は墳丘北側の上位の等高線に対応する形で明瞭に観察される点や、後述するように羨門部に対応した位



写真7 墳丘の現況 南西から

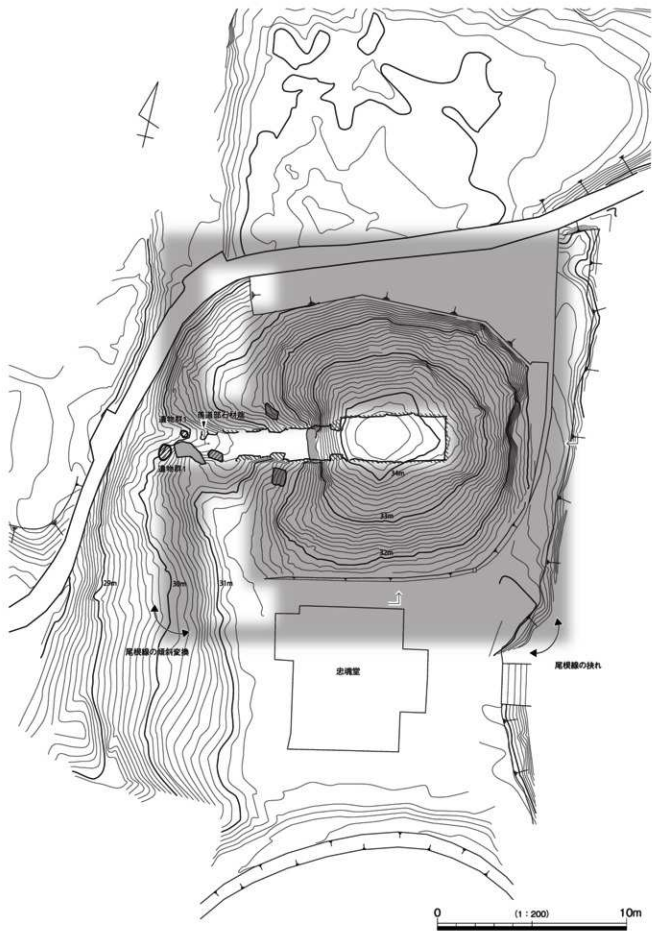


図 4

墳丘復元図

置にある点は注意される。後述する前庭部における須恵器の出土位置の解釈とも関係してくるが、開口部となる西側に限って基壇状のテラス面が設けられている可能性は排除できない。

3. 墳丘の復元(図4)

以上の現況から墳丘形態と規模を推定しておきたい。墳丘形態については、残存状態が良好な南側の状況や墳頂部付近の上位の等高線の状況から方墳と考える。墳丘規模は、南東部尾根斜面が挟まれる箇所や西側の等高線の張り出し、石室床面レベルなどからみて、一辺が約21mの規模を推定しておきたい。また、開口部となる西側については、テラス面の状況や前庭部を示唆する須恵器群の出土位置との関係から、最低1段の基壇状施設が設けられていた可能性を指摘しておきたい。

4. 横穴式石室の所見(図5.6)

横穴式石室は、玄室左側壁側を中心として墳頂部からの流入土が多く見られたため、これらの最低限度の除去を行い、図化を行った。流入土により、玄室に比べ前室・羨道部側の方が15cm程高くなっているが、平面プランの図化に大きな支障をきたさないものと考え、現況の石材の下端を図化している。図化の方法は、前室・羨道部の壁面は手書き実測を行っているが、玄室については左側壁上部を中心に倒壊の危険性がみられたため、トータルステーションの補正機能を活用した写真実測を行った。床面平面・断面については、全てトータルステーションによる図化を行っている。

横穴式石室は、羨道部と前室界、前室と玄室界に立柱石をもつと同時に前壁石材が一段下がる複室構造をもつ。現況での石室全長は、約11.8mを測る。また、現状の羨道部右側壁西端の石材の更に西側では昭和32年調査時に別の石材が検出されている。後述するように、この石材は現状の羨道部石材と比較しても高さや位置ともに一致する状況が確認できるため、羨道部は現況より更に延

びると考えられる。この石材を羨道部右側壁の一部とした場合の石室全長は約13mに達する。石室石材は奥壁最下段の安山岩製の大型石材や玄門部立柱石を除きほぼ花崗岩から構成されている。以下、玄室から調査所見を提示する。

玄室 現況で玄室長5.5m中央部での幅2.5mであり、長幅比がほぼ1.2の長方形を呈する。奥壁付近と玄門部付近では幅がやや減ることから、緩い胴張りの形態をもつ。現況での床面積は、12.8㎡である。天井石は4枚の花崗岩の大型石材から構成されており、現況で高さ23～25mを測るが、水平には高架されておらず、玄門部付近が若干持ち上がる。側壁は、基底石に大型石材を用いる点は共通するが左側壁の方が上部まで大型の石材を用いており、左右で段数が異なる。これは天井石下の1段目の石材下面を除いて、全体的に目地の通りが良好でないことに現われている。横断面の形状は、下より2段目までは垂直積み近く、それより上位では持ち送りが顕著となる。この傾向は、奥壁と玄門部付近で顕著となるが、奥壁付近では側壁と跨るよう石材が積み上げられており縦・横断面ともに持ち送りがきつい。ただ、奥壁寄りの左側壁上位のは、盛土の流出と石材間の介石の脱落が著しいことから、二次的な変形を受けていることも考慮しておく必要があるが、それでも奥壁寄りでも持ち送りは顕著に認められる。玄門・前壁付近での側壁は、他の玄室内と同様に床面から2段目より上位に持ち送りが認められるが、奥壁で観察されるような側壁と共有する石材はみられない。

奥壁は、最下段の幅約2m高さ約1.4mの大型石材の上位に、横積みされた扁平な石材2石を経て天井に至る3段構成となる。奥壁の下位に大型石材を置き、上位に扁平な石材を横積みする状況は、醍醐3号墳や穴栗師(綾織塚)古墳など同じ綾北平野の大型横穴式石室墳にみられるものである。これらの奥壁の中心石材両隣には6段程度の小型の扁平な花崗岩がみられるが、先に述べたよ



写真8 玄門・前室 北西から



写真9 玄室 西から

うに側壁と跨りつつ持ち送られながら積み上げられている。この状況は、奥壁と側壁の両者の構築が同時に進行したことを示している。

前壁・玄門 玄門部は内側に迫り出す高さ1.5m幅0.5mの立柱石が一段下がるマグサ構造をもつ天井石を直接支持する形となるが、南側の立柱石はマグサ構造となる天井石と僅かな接点しか持ちえておらず、専ら壇丘盛土でそれを支持する形となる。しかし、醍醐3号墳や穴薬師(綾織塚)古墳のみられるような、立柱石と天井石との間に玄室・前室側壁と共有する石材を介していない。前壁は、立柱石上位の櫛石と小型の合石を介して別の石材が積まれた2段構成となる。石室主軸方向の縦断面でみると、これら2石は垂直ではなく上位の石材が奥壁側へ明確に迫り出している。奥側に迫り出す前壁上位の石材と玄室天井石は別とみられ、玄室天井石は前壁の上位に重ね架けされている。この玄門・前壁構造は、後述するように醍醐3号墳や穴薬師(綾織塚)古墳など玄門立柱系統の石室の編年指標となるだろう。

前室 玄門立柱石から約2.5m開口部側の両側壁には、内側へ張り出すように据えられた中型の石材がみられる。右側壁は柱状を呈していないが、平面プランや周辺の壁材と区別される法量をもつ石材が縦位に据え置かれていることから、前門立

柱石と考える。前室幅は、玄門部付近で約1.8m、前門部付近で約1.65mを測り、玄門部寄りの天井石が1枚残存しているが、これより羨道部側では失われている。玄門部付近の側壁は、高さ約1.8mの5段構成となる。現状での最下段には、基底石と推定される大型石材の端がみえており、玄室との比較において床面は現況から0.3～0.4m下位にあると推定できる。側壁の石材の法量は、基底石を除いて玄室と比べ小型のものとなるが、同様に上部は持ち送りに積み上げられている。前門部は立柱石の端が下より側壁2段目の石材の端までしか到達しておらず、天井石を支持するにはあと数段必要となる。

羨道・前庭 羨道部については、右側壁2段、左側壁1段のみ確認でき、右側壁の最前列の石材は長辺が内側に傾き、後世の移動を受けている可能性が高い。玄室の床面のレベルから判断して、下位にもう1段の基底石が遺存していると考えられる。天井の有無については、現況から検証の術はないが、後述する前庭部の須恵器出土位置を考慮すると、羨門部付近まで天井石が高架されていた可能性が高い。床面幅は、前門付近で1.4m、開口部側で1.2mと前門部寄りでは幅を減じている。現況からの羨道部の所見は以上であるが、ここで改めて昭和32年調査時に検出された石材と須恵



写真10 玄室天井石 西から



写真12 奥壁と左側壁の持ち送り



写真11 奥壁と右側壁の持ち送り



写真13 奥壁から玄門部を見る

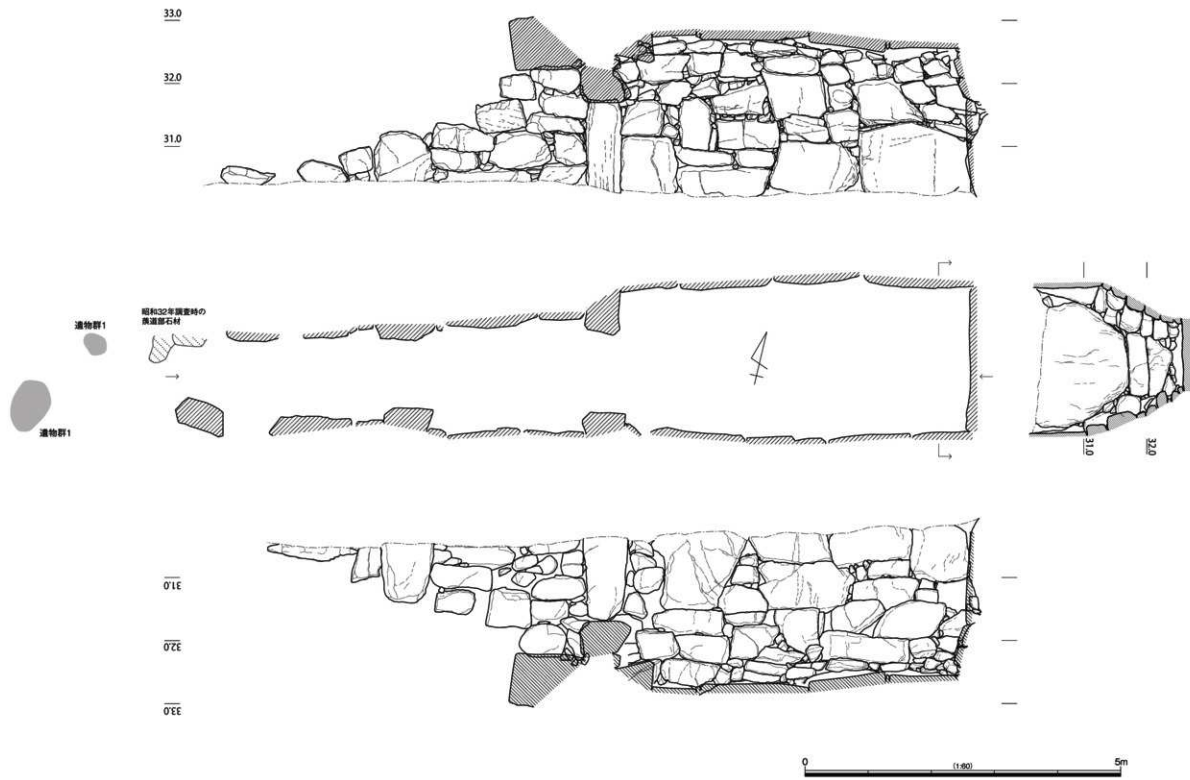


図5 横穴式石室平面・壁面

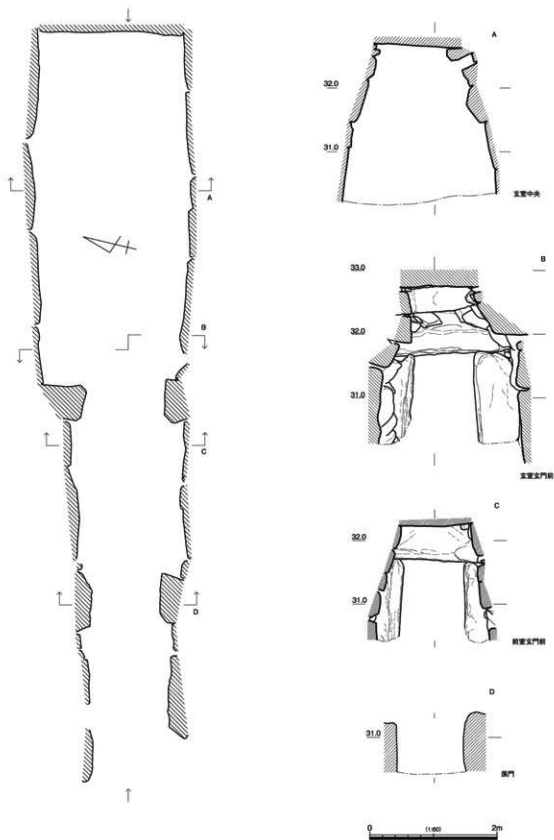


图6 横穴式石室平面·断面



写真 14 前壁の構成



写真 15 前室から玄門部を見る



写真 16 前室・前門左側壁



写真 17 前室・前門右側壁

器群との関係のみてみよう。

昭和 32 年調査では、石室全体の平面と奥壁・左側壁が図化されるとともに、調査区とみられる須恵器・土師器群の出土位置も示されている(坂出市史編纂委員会 1988)。原因を確認することはできなかったが、市史編纂時の版下を複写した資料と、発掘当時の写真資料を点検し、今回作図した石室平面図と図上で石材群と須恵器・土師器群の出土位置を照合した。照合の結果、垂直・水平方向ともに大きな誤差は認められなかったことから、これらを交えて説明を加える。

羨道部右側壁の延長上には、2 石の石材が存在する。この内、東側 1 石は羨道部右側壁と同様に石室主軸方向に据え置かれているため側壁を構成すると考えられるが、西側の 1 石は側壁に接するとともに直交して据えられている。この 2 石が原位置を保った状態であれば、東側の 1 石は羨門部を示すと同時に北側へ伸びる外護列石となる可能性が高い。外護列石については、今後の発掘調査を待たなければならないが、復元については同じ複室構造をもつ玄門立柱系統の横穴式石室墳である醍醐 3 号墳の構造が参考となる。第 4 章で紹介するように、醍醐 3 号墳では羨門部石材が外護列石と共用した状態で検出されている。これらの石材の前面には須恵器・土師器群が検出されている(遺物群 1・2)。遺物群 1・2 上面の出土レベルは、

2 石の石材よりやや下にあるようであり、完形に復元される個体も多いことから、出土位置は廃絶時の状況を止めていると考えられる。また、出土位置が羨門部両側壁の延長線上より南北にはみ出すように検出されている点は注意される。羨門部より外側より出土していることは明らかであるが、出土状況からみて羨門部より幅が広い前庭部を想定しておく必要がある。

5. 出土須恵器の所見(図 7)

新宮古墳出土の須恵器については、既に報告がある。これらは上記の前庭部出土資料(川畑・渡部 2008)と出土位置は不明だが府中町鼓岡神社収蔵資料(香川県埋文セ 2010)の二者がある。後者については、収蔵履歴や保管中の混乱等もみられることから、今回は前者の前庭部出土資料を検討対象とする。また、昭和 3 2 年の調査記録には、土師器との記載がみられるが、所在不明のため確認ができなかった。

器種は蓋杯(図 7-1 ~ 9.20)、有蓋高杯(図 7-10 ~ 16)、無蓋高杯(図 7-17.18)、台付椀(図 7-19)、瓶(図 7-21 ~ 28)、甕(図 7-29)がみられる。一部に TK217 併行期以降に下る資料(図 7.6.7 ~ 9.18 ~ 20)が存在するが、主体を占める蓋杯(図 7-1 ~ 5)や有蓋高杯(図 7-10 ~ 16)、無蓋高杯(図 7-17)は、法量や形態、透孔の属性からみて TK209 型式併

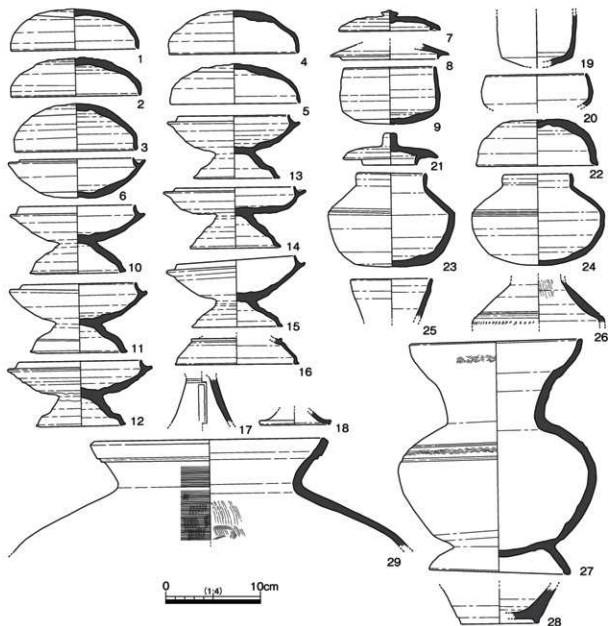


図7 前庭部出土須恵器

行期と考えられる。特に有蓋高杯(図7-10～16)は器台状に踏ん張る脚台をもち、集落遺跡であまりみられない形態をもつ。

これらの資料は、型的な時間幅や出土状況を考慮すると、数回の追葬に伴い行われた前庭部儀礼に使用された一群と考えられる。従って、追葬時期を示すことは疑いないが初葬時期についてはこれらの資料から判断することは困難であり、石室形態等の検討を進める必要がある。

第4章 醍醐3号墳の調査

1. 醍醐3号墳の立地と現状(図8)

醍醐古墳群は、綾北平野の北西部の城山東麓に位置する。古墳群は、城山山頂から急傾斜の斜面が経いた後、平地部との接触部となる標高40～

60mの緩傾斜地に形成されている。これまでに11基の存在が周知されており、1・2・3・7号墳は玄門立柱系統の大型横穴式石室を内包することが既に知られている。現状は果樹園等に利用されているが、近年荒廃が進んでおり、墳丘等の観察が困難となりつつある。古墳群からの眺望は主に北・東方向が主体となる。南東から南方向は、尾根線によって遮断されるため、新宮古墳や穴室師(綾織塚)古墳等の横穴式石室墳を視認することはできない。

醍醐3号墳は群全体の中でも南東部に位置し、昭和60年度に墳丘・石室を対象とした確認調査が実施されている。その成果については、一部公表されている(廣瀬編1986)されているものの、墳丘トレンチの調査記録や前庭部を中心とした外護列石、横穴式石室の詳細については報告されて

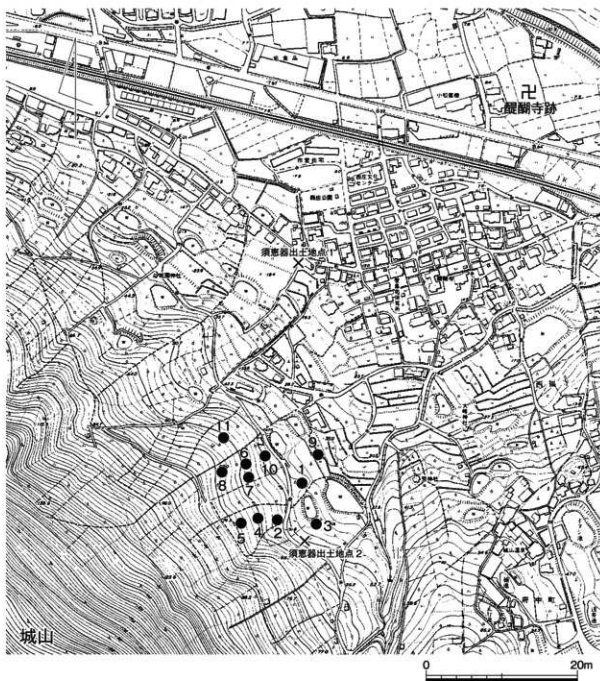


図8 醍醐古墳群分布



写真18 醍醐3号墳から綾北平野北部を望む



写真19 調査前の墳丘 南から

おらず、これらについて今回の報告に含め、綾北平野の大型横穴式石室墳群を考える際の資料とする。

醍醐古墳群の周辺の遺跡として、北へ約500mの山麓には小型の横穴式石室を内部主体とする別宮古墳群が周知されているが詳細な内容は把握されていない。また、眼下の綾川左岸の平地部には、8世紀創建とされる醍醐寺跡が存在している。

2. 墳丘・横穴式石室の現況(図9)

西側の上位斜面側に南北に農道が敷設され、北側には溜池及びその堤体が付着しているが、西側の農道との間に幅約5mの帯状の平坦面を隔てて、高さ約2mの墳丘の高まりが観察できる。西側の平坦面の傾斜変換点となる標高48mラインを中心に追跡すると、直径(辺)が約20mの墳丘規模を想定することができる。また、西側の墳丘の等高線が直線状を示し、東側は攪乱等が多くみられるが横穴式石室開口部となる南東隅から緩い円弧を描くように等高線がみられることは注意される。後述するトレンチの調査成果とも関係してこよう。墳頂部には約3m四方の平坦面が観察される。横穴式石室は南東方向に開口しており、二次的に移動を受けた前室天井石の背後から玄門部を潜り玄室へ進入することができる。

3. トレンチの設定状況と所見(図10～13)

墳丘は、4本のトレンチを設定している。1トレンチについては、墳丘の西側で横穴式石室に直交する南西から北東方向、2トレンチは1トレンチ南側に斜め方向に設定されている。3トレンチは2トレンチ南側、4トレンチは横穴式石室羨道部から前底部にかけて位置することとなる。以下、トレンチの調査所見について概要報告書を参照しながら新たに提示する図・写真を交えながら説明していく。

1 トレンチ(図11～13)

墳頂部から現状の墳裾を経た農道際まで設定さ



写真20 1・2トレンチ全景 墳頂から

れた長さ約15m幅約1.3mのトレンチである。墳丘盛土の断ち割り調査は行っていない。墳頂から南西方向へ約3mの地点でテラス状の平坦面が記録されているが、概要報告書のように、現代遺物を含む層位から形成されていることから、開墾等の二次的な改変とみられる。墳頂部から南西方向へ約7mから11m離れた地点において周溝とみられる凹地が検出されている。周溝は、上面幅約6m下面幅約4mを測り、最下層は15層とする砂層でこの砂層は2トレンチや前底部の4トレンチにおいてもみられるものであり、最初期の堆積層と考えられる。周溝底面から中位かけて多量の安山岩の塊石を含んでいる。図12に示す断面図には表現されていないが、墳丘側では底面に接して人頭大の安山岩塊石が南北に据え付けられており、墳裾を示す外護列石(列石4)と考えられる。列石4の内側には、拳大の安山岩製の角礫や板状石材が検出されており、これらは列石の裏込めと判断できる。また、この裏込めの状況は、後述する4トレンチの列石1の状況に類似しているものである。現状で列石は一段であるが、後述する前底部の列石1～3の状況や、周溝内に転落した石材の出土状況からみて、数段程度の列石が存在していた可能性が高い。

周溝の西肩部付近においても多量の石材が検出



写真21 1トレンチ全景 墳頂に向かって

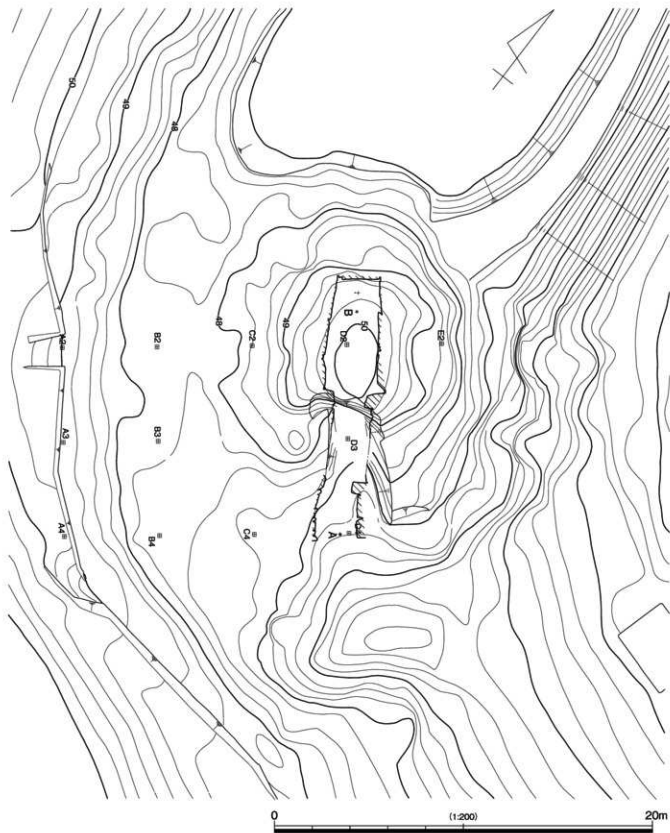


图9

填丘測量圖

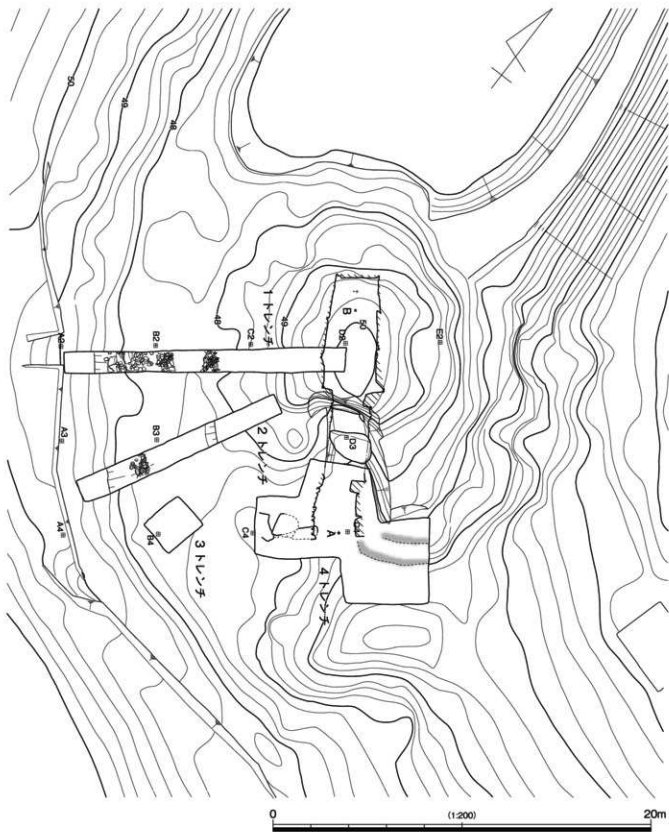


図 10

トレンチ配置

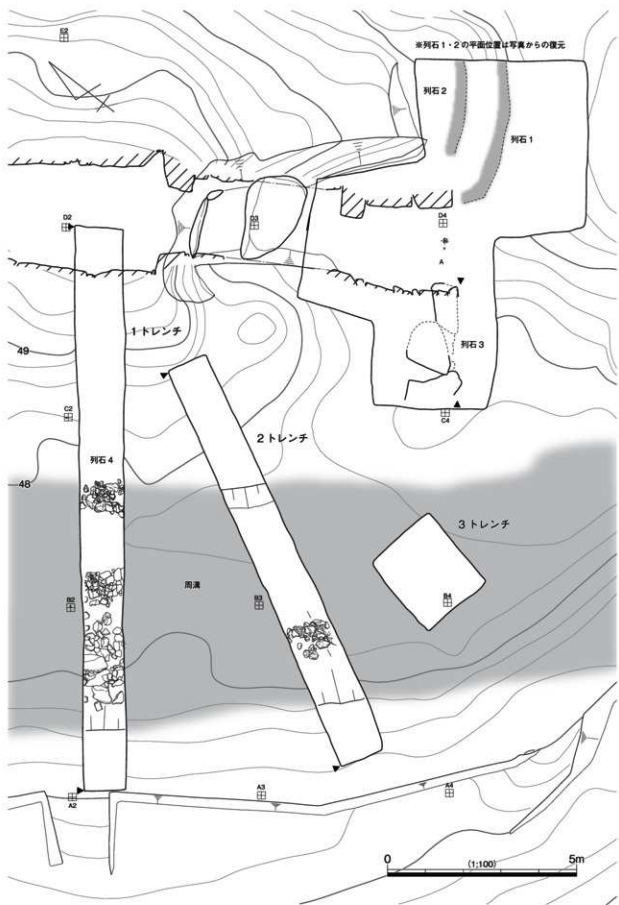
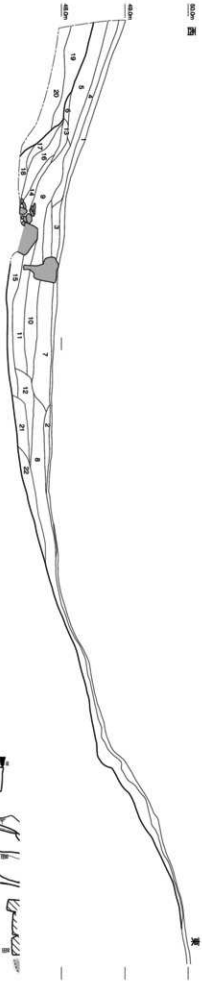


図 11

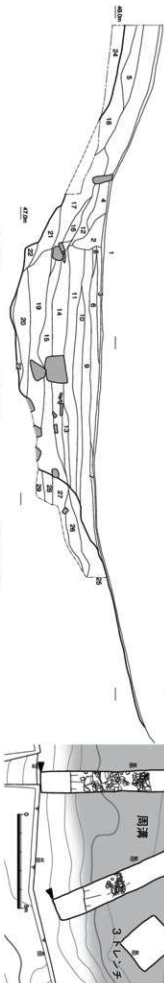
トレンチ平面



- 1 埋藏土層
- 2 埋藏土層
- 3 埋藏土層
- 4 埋藏土層
- 5 埋藏土層
- 6 埋藏土層
- 7 埋藏土層
- 8 埋藏土層
- 9 埋藏土層
- 10 埋藏土層
- 11 埋藏土層
- 12 埋藏土層
- 13 埋藏土層
- 14 埋藏土層
- 15 埋藏土層
- 16 埋藏土層
- 17 埋藏土層
- 18 埋藏土層
- 19 埋藏土層
- 20 埋藏土層
- 21 埋藏土層
- 22 埋藏土層

西

東



- 1 埋藏土層
- 2 埋藏土層
- 3 埋藏土層
- 4 埋藏土層
- 5 埋藏土層
- 6 埋藏土層
- 7 埋藏土層
- 8 埋藏土層
- 9 埋藏土層
- 10 埋藏土層
- 11 埋藏土層
- 12 埋藏土層
- 13 埋藏土層
- 14 埋藏土層
- 15 埋藏土層
- 16 埋藏土層
- 17 埋藏土層
- 18 埋藏土層
- 19 埋藏土層
- 20 埋藏土層
- 21 埋藏土層
- 22 埋藏土層

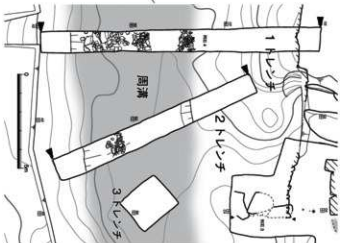


図 12

トレンチ断面



写真 22 2 トレンチ周溝内転落石材

されている。検出位置や出土レベルからみて、原位置を保った一群ではないが、西側に偏った出土位置を示す点は注意される。これらが墳丘斜面やテラス等に施されていた石材が転落したと考えた場合には、墳丘の上位まで貼石等の石材により外表装飾がなされていたことになる。

2 トレンチ (図 11.12)

2 トレンチは、1 トレンチ南側で墳裾付近から周溝部にかけて設定された長さ約 11.5m、幅約 1.3m のトレンチである。トレンチ北東隅から約 4m 南西方向へ移動した地点で墳裾とみられる落ち込みを確認し、これより南西側へ 5.5m が断面逆台形の周溝となっている。断面図には墳裾付近の最下層でやや移動を受けたとみられる石材群が図示されているが、平面記録は作成されておらず明示することができない。断面図の 25 から 29 層は、層相からみて墳丘盛土と考えられる。また、1 トレンチと同様に、墳裾から離れた位置の周溝内の中位に安山岩塊石が検出されている。これらは原位置を保ったものではないが、1 トレンチと同様に墳丘からの転落を想定した場合には、上部に敷設されていた石材が転落したものと推定できる。

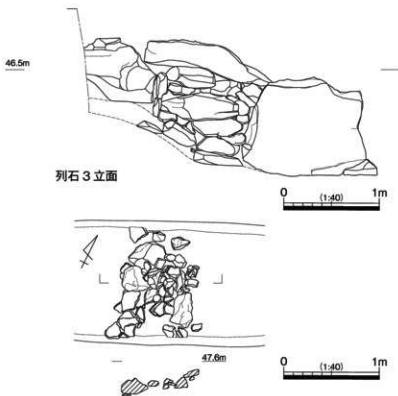


図 13 列石 3 立面・列石 4 平面・断面

3 トレンチ (図 11)

2 トレンチ南側に設定した 2×2.5 m のトレンチである。断面図が作成されているが、写真記録がないことや、図面中に地山表記や判断がなされておらず、平・断面図は掲載していない。位置的には、周溝内に含まれると考えられる。

4 トレンチ (図 11.13)

羨道部と前庭部に設定したトレンチである。羨道部については後述することとしたい。羨門の両側において、列石 1~3 を検出しているが、列石 1・2 は平・立面記録が作成されておらず、写真から位置を推定したものである。列石 1・2 は羨門左側壁から派生する外護列石であり、列石 1 は最下段の羨門基底石からやや膨らみながら北東方向へ延びる。羨門基底石に接する部分に板状安山岩をハの字状となるように縦位に据



写真23 4トレンチ全景 南東から



写真24 列石1・2 南東から



写真25 列石2 南東から



写真26 列石3 南東から



写真27 列石3 東から

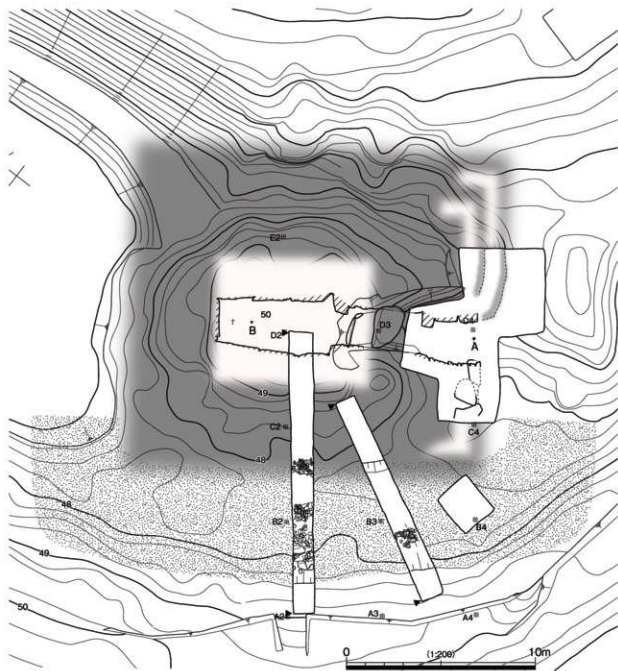


図 14

墳丘復元図



写真 28 玄室の現況 南東から



写真 29 奥壁から玄門を見る

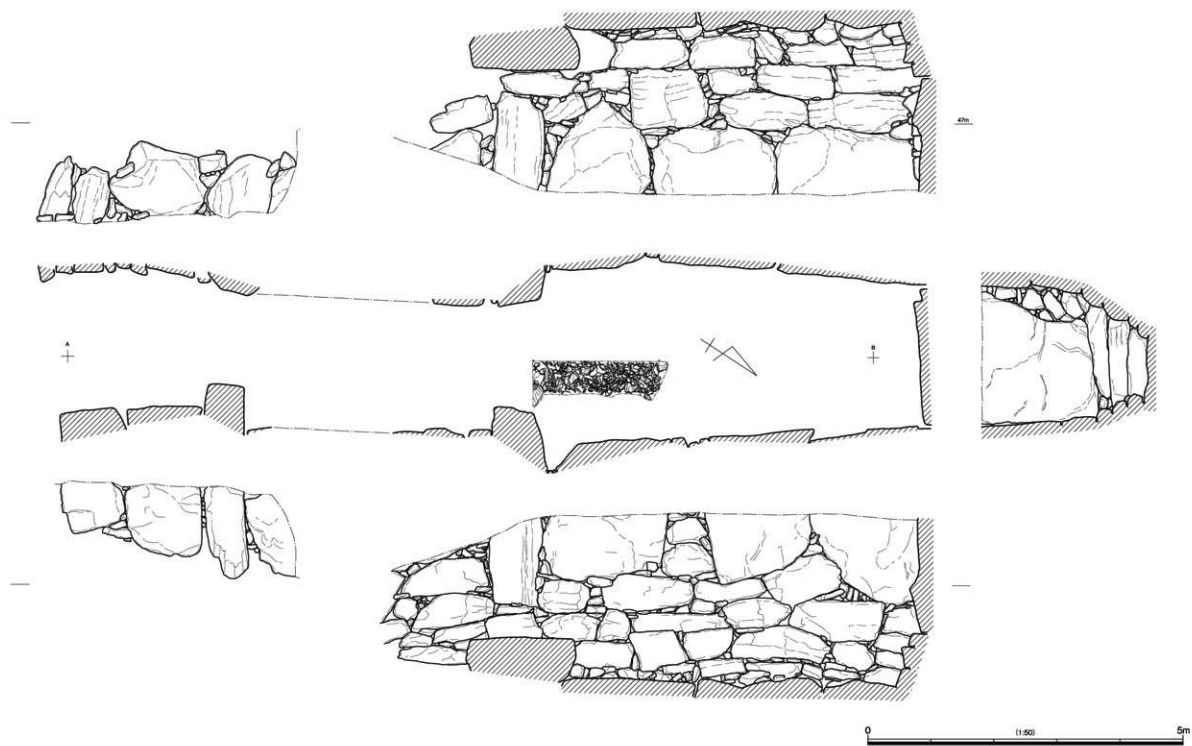


图 15 横穴式石室平面·壁面

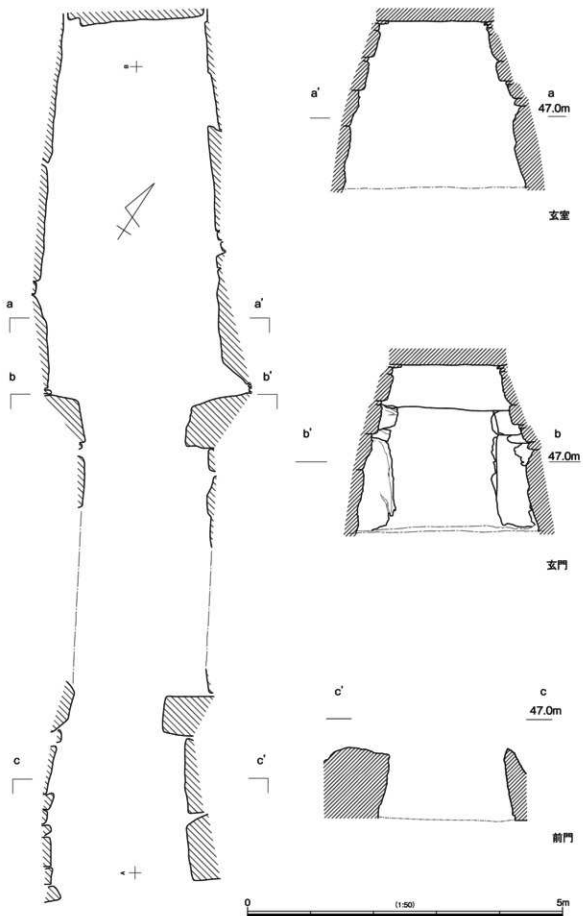


圖 16

横穴式石室平面・断面



写真 30 玄室右側壁 奥壁から

え、それ以降は人頭大以上の安山岩塊石を1段敷設する。背後には拳大程度の角礫が充填されており、これらは裏込めと同時に列石2との間のテラス面を形成している。外護列石は現状で1段のみ遺存しているが、列石2の石材の下面レベルからみて、元来は2段構成となる可能性が高い。

列石2は、羨門部左側壁基底石の中位のレベルから派生するもので、列石1と並行する形で直線的に北東へ安山岩3〜4段程の板石を垂直に積み上げる。写真から判断して、板石積みの高さは約70cm程度と推定される。羨門部左側壁基底石との接続部分の石材が失われているが、列石1との間のテラス面の石材の残存状況から判断して、列石1と同様にハの字状に聞く可能性が高い。板石積みの上部は削平を受けているが、墳頂部との距離から判断して、やや広いテラス面を想定しておかなければならない。

列石3は羨門部右側壁基底石から派生する外護列石である。羨門部基底石を石室主軸に直交方向で縦位に据え付けることにより壁面を構成したのち、南西方向へ3m程延びる。平面位置は列石1・2よりも奥壁より位置することから、左右の列石の平面位置は対称とはならない。羨門部基底石と共用する縦位の大型石材から一端板石積みとなりトレンチ端では再び大型の塊石を縦位に据え付ける。現状での列石の上端のレベルは、南西方向のトレンチ端に向かうにつれて上昇しているが、羨門部基底石と共用する縦位の大型石材の上部に別の石材が積まれることにより、水平に整えられていた可能性が高い。トレンチ端の大型塊石の下部には石材が存在していないことから、列石下部は墳丘構築面の傾斜に合わせるように石材を敷設していたと考えられる。

これら列石1〜3の状況は、トレンチ1・2における周溝とともに、本墳が方墳であることを示すものと考えられよう。

4. 墳丘の復元 (図14)

各トレンチの調査成果を基にして墳丘規模・



写真 31 玄室左側壁 奥壁から

形態の復元を行う。1・2トレンチの周溝や列石4の状況からみて、墳丘南西側のラインはほぼ確定的である。石室主軸から約8m付近を墳裾、周溝幅を約5mと推定しておきたい。前庭部側の南東方向は、列石1〜3の状況から羨門部を挟み左右で非対称となりながらも、玄門部から南東側へ8m離れた位置に墳裾ラインを推定できる。これらの状況から、本墳が方墳であることは明らかであろう。問題は、トレンチ調査が行えていない北西部と北東部に対してどの程度の墳丘を見積もるかであろう。北西部は、溜池が取り付いているため、現状から推定する材料に乏しい。ここでは石室奥壁位置を考慮し、玄門部から約11m付近を墳裾として想定しておきたい。

北東部は、南西部と同様に石室主軸から約8m付近を墳裾の候補とした場合に、現況の傾斜変換点は更に外側に存在している。北東側は低位の斜面となることから、低い基壇状施設が敷設されているかもしれないが、現状では石室主軸を中心に対照的な墳丘を想定しておきたい。

以上の点から、石室主軸となる北西から南東方向に約20m、これに直交する南西から北東方向に約17mの方墳として捉えておきたい。

5. 横穴式石室の所見 (図15.16)

横穴式石室については、前室の一部を除いた箇所が調査対象となっている。また、玄室は玄門部付近の床面の掘り下げ途中に墳丘背後の溜池からの漏水がみられたため調査を中止し、羨道部のみ床面まで掘り下げを行っている。

また、石室図化については、平・断面を手書き実測により作成し、壁面図については写真測量を用いて図化を行った。

横穴式石室は、右側壁を基準にして全長約14mを測り、玄門立柱石を有する複室構造をもつ。玄門部までは玄室3枚、玄門部1枚の天井石が遺存しているが、これより羨門部側では失われている。玄室は長さ6m、幅は奥壁付近で2.5m、玄門部付

近では2.7mとやや開く長方形を呈し、長幅比は約2:1で床面積の現況での計測値は15.5㎡となる。玄室高は2.6mを測るが、玄門部付近の比較的浅い位置に礫床が検出されており、現況がほぼ本来の玄室高を示していると考えられる。

奥壁は基底石に大型の安山岩を据え、その上部は板状安山岩を横積みする4段構成であり、右側壁との取り合い部は小型石材を補う。基底石より上位は側壁に合わせて持ち送りが行われているが、側壁との交点は天井石際まではほぼ直角に交わるように積み上げられている。

側壁は、基底石に大型石材を用いることで腰石とする点は共通するが、それより上位は左右で石材の様相が異なる。右側壁は4ないし5段構成となり、基底石より上位に左側壁よりも大型の石材が使用されている。基底石上面と奥壁寄りの3段目上部の目地の通りが良好であり、後者の目地は玄門部楣石の下面のレベルにはほぼ対応している。左側壁は4から5構成となり右側壁より小型の石材を用いているが、右側壁と同様に玄門部楣石の下面に対応する目地の通りが良好である。断面形は基底石より上位が緩やかに持ち送られる逆台形を呈し、玄門部付近から玄室中央での天井石幅は1.2mであるが奥壁付近では0.9mと幅を減じていき、持ち送りがきつくなる。

玄門部の立柱石の内、右側壁側は張り出しが弱く、前室右側壁と変わりがない。立柱石は天井石を直接支持せず、間に石材を介している。左側壁側では不明確であるが、右側壁側の立柱石と天井石との間の石材は、玄室の側壁と跨るように積まれている。この点は、本墳の構築時期を示す特徴となろう。玄門部の天井石は前室の天井石が失われているものの、前室左側壁上部の石材の残存状況から推定して、前室天井石より一段下がることにより楣石となるのは確実とみられる。この天井石によって構成される玄室前壁はほぼ垂直となる一段構成となり、現状の観察では玄室天井石が玄門部楣石の上部に重ね架けされている。この前壁



写真32 羨道部から前門部

の構成も本墳の編年の指標となると考えられる。

前室は、崩落した天井石によって中央が未調査となるが、長さ約4m幅約2mの規模を推定できる。左側壁の状況から、5段構成以上と推定できるが、原位置を保つ天井石がみられず、高さを明らかにすることはできない。基底石の大半が流入土によって覆われるが、玄室と比較して石材の法量は小型のものが使用されているようだ。前門部は内側に張り出す立柱石によって作出されているが、玄門立柱石と同様に右側壁側の立柱石の張り出しが不明瞭であり、使用される石材も明確な立柱状ではない。羨道部との側壁のラインに不整合がみられるため区画意識自体は読み取れるが、かなり形骸化した印象を受ける。羨道部は前述したとおり、外護列石と接続することから羨門部基底石は完存していると判断できる。左右の羨門部基底石の位置は揃わず、列石3に接続する右側壁が突出する。右側壁を基準とした計測では長さ約2.8mを測り、前門部付近では幅2m、羨門部で2.2mと右側壁が若干開きをみせる。壁体は基底石の1段のみ残存しており、高さ約1.2mを測る。床面まで調査が及んでいるが、玄室床面のみみられたような礫床は存在していない。

6. 出土遺物の所見 (図17)

遺物は4トレンチの羨門部付近を中心として出土しており、周溝が存在する1～3トレンチでは殆ど見出されていない。須恵器高杯(図17-1)は杯部と脚部接合部の破片であり、2方透かしが辛うじて確認できる。図17-2は有沈線の高杯脚部片とみられる。須恵器甕(図17-3)は、有段口縁をもつ資料であるが、TK217型式併行期にみられる列点文や波状文による加飾は行われていない。須恵器甕胴部片(図17-4～7)は焼成や青海波文の状況からみて同一個体とみられる。

これらの資料は、2方透かしの須恵器高杯(図17-1)や加飾のみみられない須恵器甕(図17-3)などからみて、TK209型式併行期の所産と考えられる。初葬・追葬時期を推定する良好な資料とは言えな



写真33 前門と羨道部左側壁



写真 34 墳丘の全景 南東から

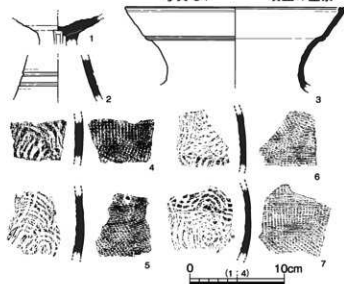


図 17 羨道部・前庭部出土須恵器

いが、これらの期間における前庭部儀礼に伴う資料と推定しておきたい。

第5章 綾北平野の横穴式石室墳の基礎資料

ここでは、綾北平野における他の横穴式石室墳の資料を提示し、新宮古墳や醍醐3号墳の評価に役立てる。提示資料は、平成24年度に測量を中心とした確認調査を行った穴薬師(綾織塚)古墳と、昭和61・63年度に坂出市教育委員会が発掘調査を行った仏願1・2号墳である。

1. 穴薬師(綾織塚)古墳(図18.19)

穴薬師(綾織塚)古墳は、五色台の南西部斜面に展開する加茂古墳群に含まれる。南部の仏願1・2号墳を含めた場合、17基の存在が確認されているが、開墾に伴う消滅などを考慮すると、20数基程度から構成されていた可能性が高い。穴薬師(綾織塚)古墳は、加茂古墳群の中でも最も高所となる烏帽子山の標高約78～80mに築造されており、綾川を挟んで対峙する城山東麓に所在する醍醐古墳群は、本墳が立地する烏帽子山の西側斜面が障害となり直接視認することができない。

墳丘は、一辺が約20mの方墳と推定され、低位側の斜面に基壇状施設の存在が推定できる。

また、墳丘斜面には貼石が露出している箇所が存在する。横穴式石室は、全長



写真 35 穴薬師(綾織塚)古墳石室

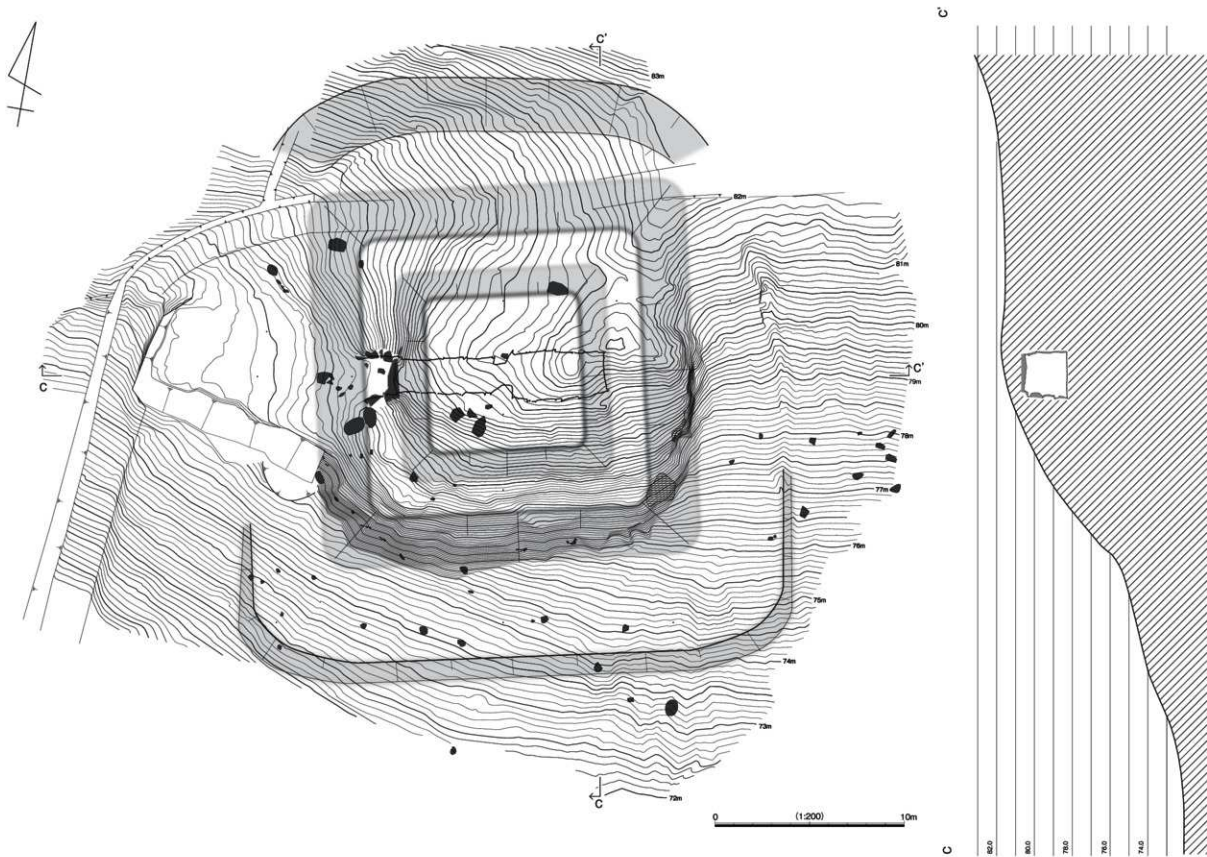


图 18 穴薬師（綾織塚）古墳墳丘測量図

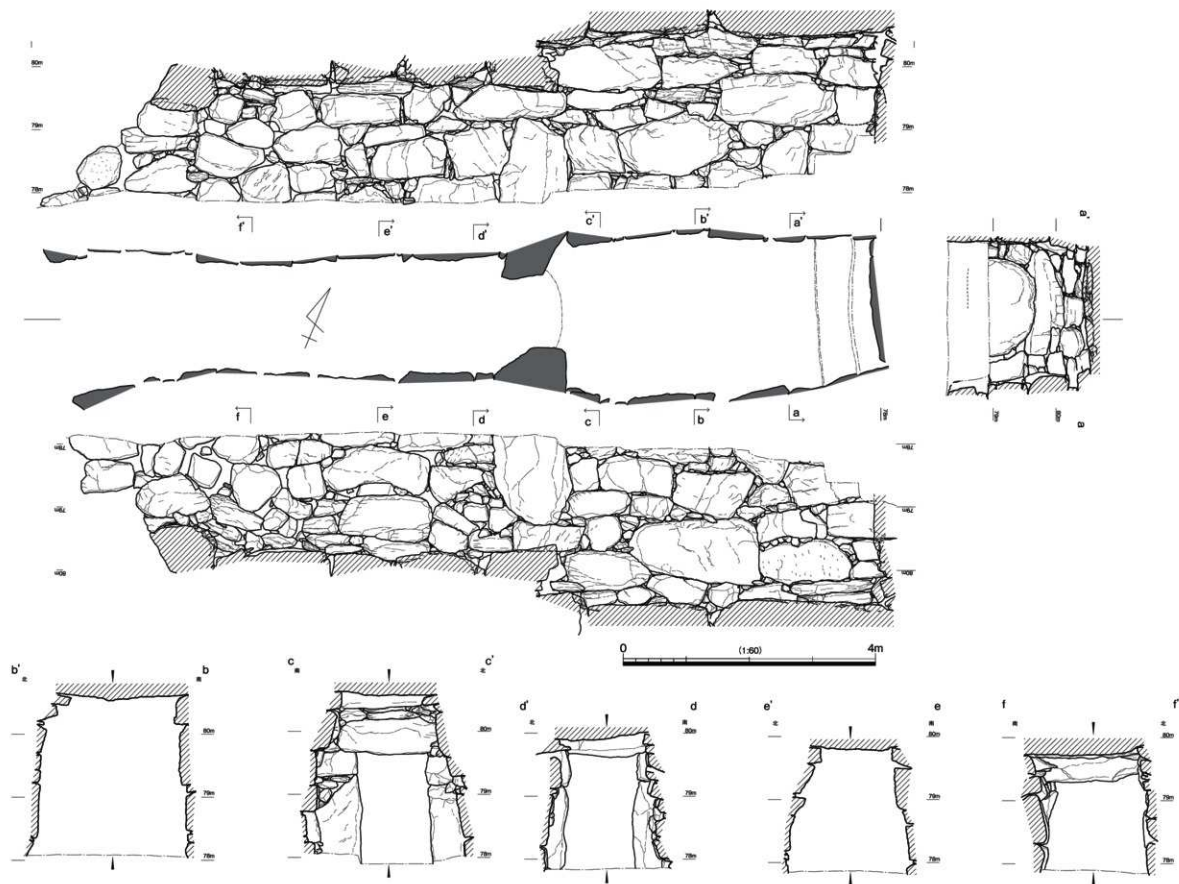


图 19 穴葉師（綾織塚）古墳石室平面・壁面



写真 36 穴葉師（綾織塚）古墳の玄門から玄室

13.2m、玄室長 5.1m、羨道長 8.1m の規模を測り、玄門部が内側に突出する玄門立柱構造をもつ。前門部は明確な立柱石を使用せず、床面幅が狭まることと、一段下がる天井石によって辛うじて区分されるもので、前室が羨道部へ変化する過渡的な様相を示す。玄門立柱石は楣石を直接支持せず、間に玄室・前室（羨道）に跨る石材を介しており、玄室前壁はほぼ垂直に立ち上がる。

これまでに石室等の発掘調査は実施されておらず、出土品も知られてない。

2. 仏願 1 号墳 (図 20 ~ 24)

蓮光寺山から南西方向に派生する標高 63m 尾根斜面に築造された直径約 15m の円墳であり、

全長約 8m の玄門立柱構造の横式石室をもつ。羨道部と玄門部に仕切石を据え、玄室床面には死床、あるいは木棺台とみられる石材が検出されている。玄室は長さ約 3.6m 幅約 1.9m、長幅比約 2:1 の長方形を呈する。玄門立柱石は左側壁側の突出が弱いが、天井石を直接支持する。羨道部には、前門部を形成する石材はみられず、前室をもたない。

玄室内からは完形品を主体とした多量の須恵器や鉄鏃、耳環が出土している。今回の報告では、これらの詳細な出土状況を省略し、全体の様相を把握しておくこととしたい。

出土須恵器は、全体として時間幅がみられる。編年上の指標となる蓋杯 (図 22-1 ~ 20) は、大量で天井部に広い平坦面をもつ図 22-12 や口縁部に明確な立ち上がりをもつ図 22-14 など TK43 型式併行期とみられる資料と、矮小なヘラ削りの範囲や形態から TK209 型式併行期と考えられる図 22-3 ~ 7.9.12.15.19 等の資料と、法量や形態から TK217 型式併行期とみられる図 22-8.10.11.13.16 ~ 18 がみられる。図 22-13 は杯 G 身と考えられる。高杯は、長脚 2 段 3 方透かしをもつ図 22-22.23 など TK43 型式併行期とみられる資料と、長脚 2 段でも 2 方透かしの図 22-25、又は下段の透かしを省略する図 22-24 など TK209 型式併行期とみられる資料、透かしがスリット状の形骸化したもの

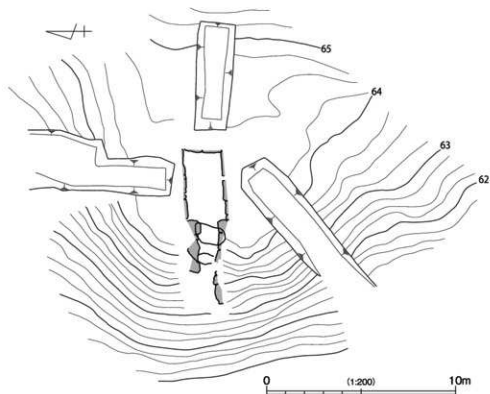


図 20

仏願 1 号墳丘測量図

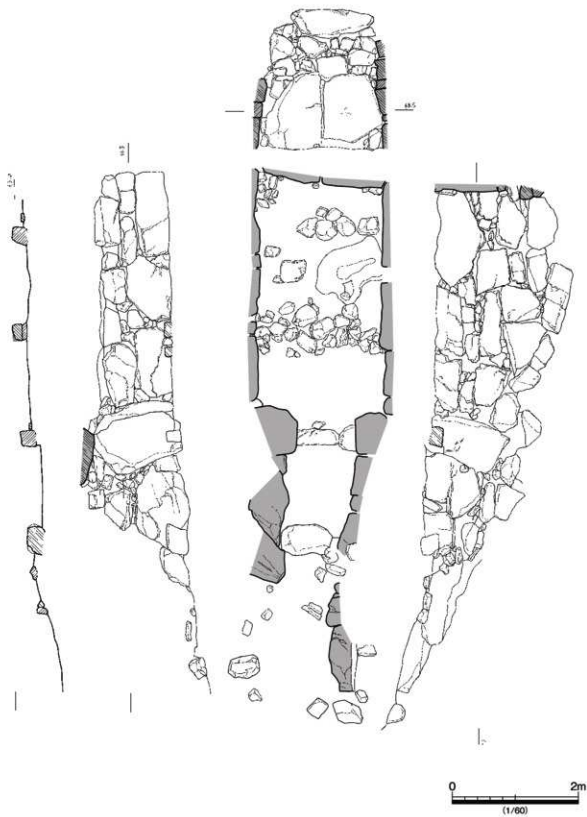


図 21

仏願 1 号墳石室平面・壁面

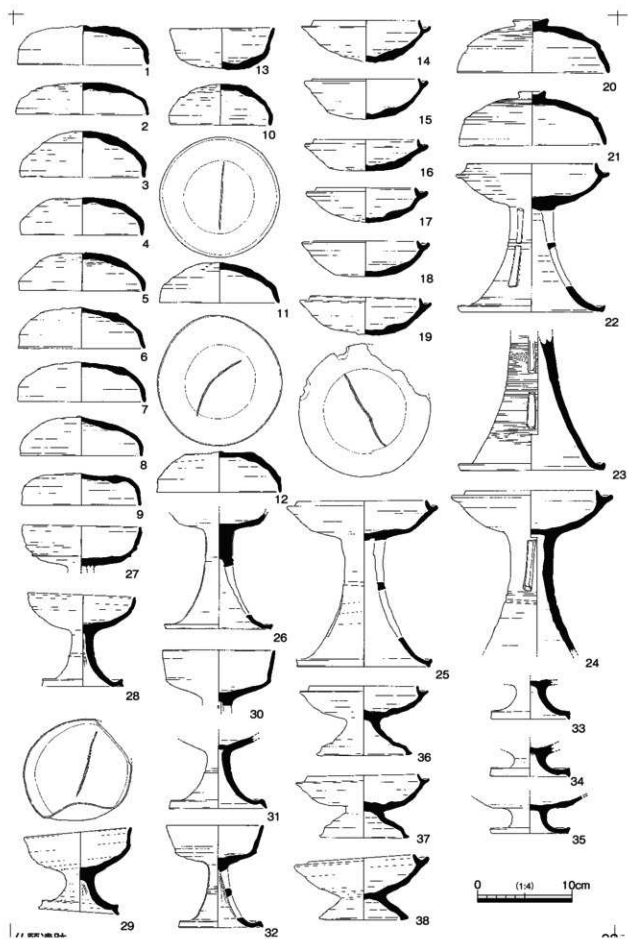


图 22 仏願 1 号墳出土遺物 1

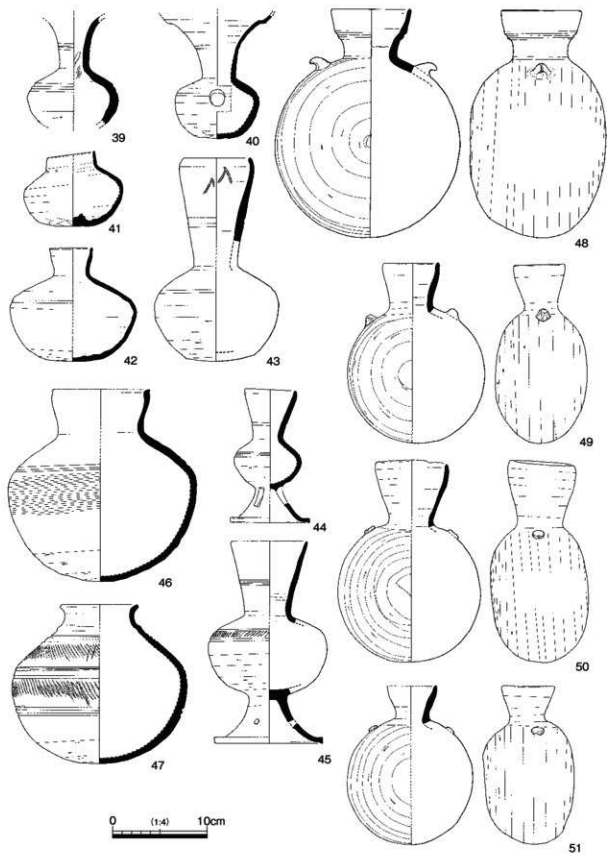


图 23

仏願 1 号墳出土遺物 2

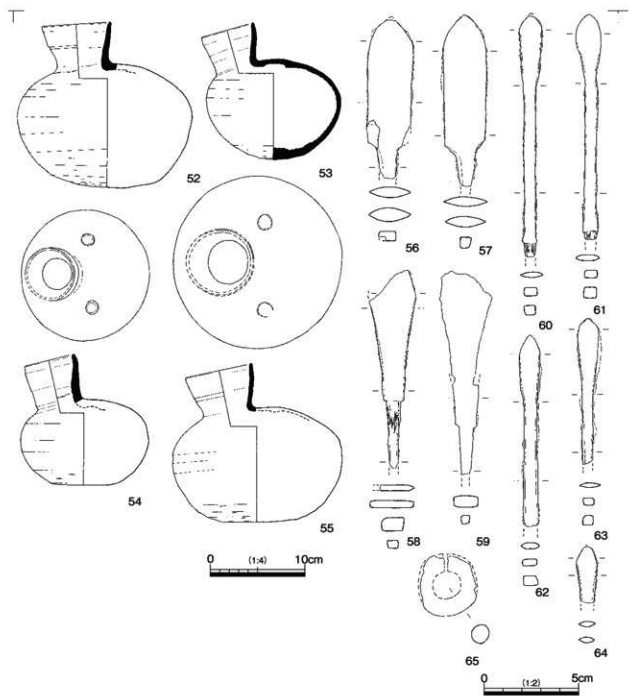


図24 仏願1号墳出土遺物3

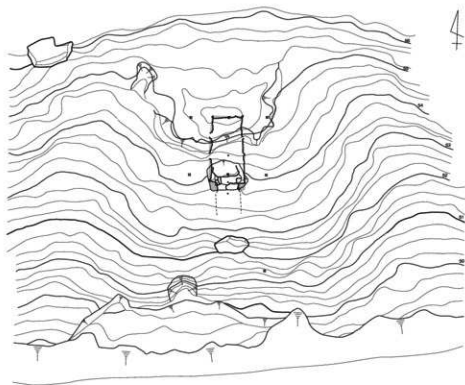


图 25

仏願2号墳丘測量図



图 26

仏願2号墳石室平面・壁面

となる図 22-26.32 など TK217 型式併行期の所産とみられる資料が混在する。TK209 型式併行期とみられ内側に踏ん張る形態の脚台をもつ蓋高杯(図 22-36 ~ 38)は、新宮古墳前庭部出土資料に類例がある。無蓋高杯(図 22-28 ~ 31.33 ~ 35)は TK217 型式以降に下る資料とみてよいだろう。

以上のように、出土した須恵器は TK43 型式併行期から TK217 型式併行期までの時間幅をもつ。これらすべてを初葬から追葬までの期間を示す資料とするには詳細な検討を行う必要があるが、玄室内出土資料であることからみて、初葬時期を推定することは可能であろう。古相を示す一群の資料からみて、本墳は TK43 型式併行期の構築と考えられる。また、蓋杯の形態や法量、長脚 2 段 3 方透かしをもつ高杯の口縁部・脚端部の形態からみて、TK43 型式併行期でも後半と推定しておきたい。有蓋平根系統の鉄鍍(図 24-56 ~ 59)や長頸鍍(図 24-60 ~ 64)は TK43 型式併行期の初葬に伴う資料と考えられよう。

3. 仏願 2 号墳(図 25.26)

仏願 2 号墳は、1 号墳より谷筋を隔てた直線距離で約 300m 北側の尾根南斜面に構築されている。墳丘は東西約 16m 南北約 13m の円墳であり、石室開口部である南側を除いて周溝が廻る。横穴式石室は全長約 5.5m 玄門立柱構造である。長さ 3.5m 幅約 1.5 ~ 1.8m の長幅比約 2.1 の長方形の玄室をもつ。玄室石材は、奥壁は 1 枚の大型石材を中心にした 3 段構成であり、側壁は腰石とみられる基底石を含む 3 ~ 4 段構成となる。天井石は大型石材 2 枚であるが水平に高架されており、玄門部で高さ約 1.5m、奥壁付近で 1.8m を測る。床面は礫床が敷設され、木箱台とみられる法量のやや大きな石材が点在している。玄門部から羨道部は調査途上に崩落したため、詳細な記録作成が行えていない。

出土遺物は、玄室より平安期の須恵器・土師器が検出されているが、初葬・追葬時期を示す遺物は出土していない。

4. 仏坂古墳(図 27)

新宮古墳から南へ約 200m 離れた同一丘陵の東斜面にある横穴式石室墳である。現況は玄室奥壁の一部が露出している。石室規模や墳丘規模を推定する材料はみられないが、玄室奥壁の状況からみて、小型の横穴式石室をもつ終末期古墳とみられる。

参考資料として坂出市郷土資料館に保管されている TK217 型式併行期とみられる須恵器碗を掲載しておきたい。

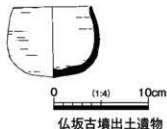


図 27

仏坂古墳出土遺物

第 6 章 綾北平野の大型横穴式石室の築造年代とその評価

1. 綾北平野における玄門立柱構造をもつ巨石墳群の築造年代(図 28 ~ 29)

新宮古墳、穴薬師(綾織塚)古墳、醍醐 3 号墳などの綾北平野の巨石墳群の評価を行うためには、まず築造年代を確定させる必要がある。各古墳の発掘調査が進んでいないことから、横穴式石室の形態を中心に築造年代の推定を行いたい。また、これらの横穴式石室墳は、前室区画を備えた玄門立柱構造を採る横穴式石室という点で共通性をもつため、系譜関係を念頭においた上での年代的位置付けが必要となる。

讃岐地域における新宮古墳、穴薬師(綾織塚)古墳、醍醐 3 号墳にみられる玄門立柱構造をもつ横穴式石室については、玄門立柱石と組み合う玄室前壁形態を中心にした編年案が既に示されている(大久保 2009. 大久保・中島 2009)。この編年案を参照しながら新宮古墳をはじめとした綾北平野の大型横穴式石室群の築造年代を推定する。

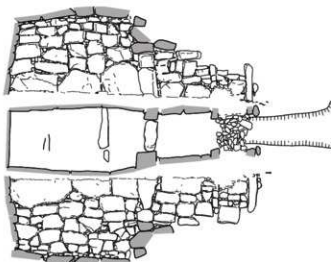
讃岐地域における玄門立柱石を使用する横穴式石室の初現は TK10 型式併行期の喜兵衛島 2 号墳や向井原古墳に認められるが、一定規模の立柱石を使用し明確な前室区画をもつ複室構造を採る横穴式石室の初現は、母神山鐘子塚古墳(松本 1985)に求められる。母神山鐘子塚古墳は、出土須恵器から TK43 型式併行期の築造が想定できる(図 30.31)。また、須恵器蓋杯(図 30-1 ~ 6)や長脚 2 段三方透かしをもつ無蓋高杯(図 30-8 ~ 12.14.15)の形態からみて、TK43 型式併行期でも古相を示すと考えられる。母神山鐘子塚の玄室前壁は、楕円石から大小二つの石材を介して斜め方向に天井石に達する構造をもち、前室区画も明瞭に区分されている。この形態を引き継ぎつつ大型化を遂げるのが大野原古墳群における椀塚古墳(久保田 2008.2009)である。椀塚古墳の前壁構成は、大型石材を斜めに架け渡し天井石に至っている。母神山鐘子塚古墳での 3 石による構成を玄室天井高の上昇に伴い大型石材 1 石で対応している。椀塚古墳は、近年の確認調査によって隣

母神山・大野原系列

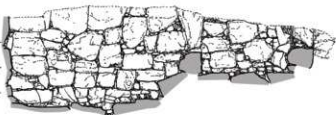
TK43



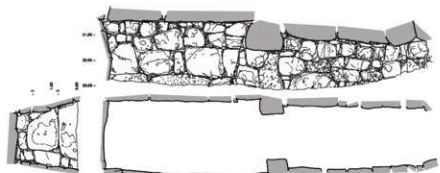
母神罐子塚



椀貸塚



TK209



平塚



図 28 玄門立柱構造の大型横穴式石室の変遷 (母神山・大野原古墳群)

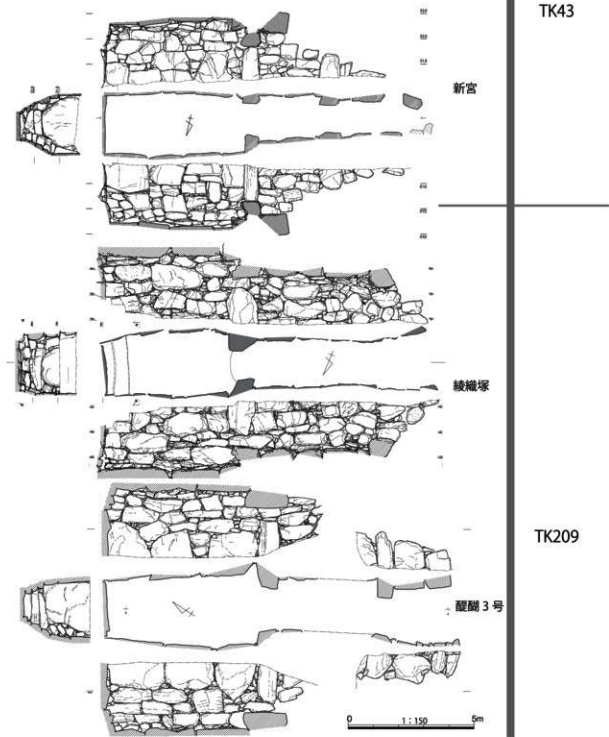


図29 玄門立柱構造の大型横穴式石室の変遷（綾北古墳群）

接する岩倉塚古墳との構築先後関係が判明しており、TK43 型式併行期でも新段階の所産と推定されている。

これらの母神山鎌子塚古墳、腕袋塚古墳の状況から、讃岐地域で複室形式をもつ玄門立柱構造をもつ大型横穴式石室の初現がTK43 型式併行期にあり、斜めに架け渡す玄室前壁構成を特徴とすることを確認しておきたい。

綾北平野において大野原腕袋塚古墳に類似する前壁構成をもつのは新宮古墳である。玄室床面積や天井高など大野原腕袋塚古墳に比べ全体的な規模が圧縮されているが、斜めに立ち上がる玄室前壁構成と前室区画を止めている。新宮古墳における出土遺物は、前庭部における須恵器群(図7)のみであるが、これらは初葬に伴う保証はない。大野原腕袋塚古墳との石室の類似性から、TK43 型式併行期の末葉からTK209 型式併行期でも初期の築造と想定しておくべきであろう。

新宮古墳でみられた前壁構成を変化させたと考えられるのが、穴薬師(綾織塚)古墳と醍醐3号墳である。穴薬師(綾織塚)古墳と醍醐3号墳の玄室前壁構成は、楣石による1石によって構成され、垂直に天井石に至る。また、玄門立柱石は直接楣石を支持せず、玄室、あるいは前室と跨る石材を介している。新宮古墳でみられた前室区画は、醍醐3号墳では右側壁側の玄門立柱石と前門立柱石の突出が弱くなり、穴薬師(綾織塚)古墳は床面積や一段下がった天井石によって示される程度に形態化する。この変化は、大野原古墳群において腕袋塚古墳に後続する平塚古墳(久保田2009)においても認められており、型式学的に妥当性が高い。問題は、TK43 型式併行期末葉からTK209 型式併行期初頭と推定した新宮古墳の築造からどの程度の時間幅を見積もる必要があるのかであろう。そこで、新宮古墳・穴薬師(綾織塚)古墳・醍醐3号墳の石室の基底石は完存していると判断できるため、玄室前壁構成や前室区画以外の要素として石室全長を検討材料に加える。計測値は新宮古墳(13m)から穴薬師(綾織塚)古墳(13.2m)、醍醐3号墳(14m)という形で非常に類似している。醍醐3号墳の前庭部列石の敷設に伴う羨門部端の不整合を考慮すると、1m以内の不一致は誤差の範囲として捨象することができよう。また、玄室床面積が新宮古墳の(12.8m)から醍醐3号墳(15.5m)へ若干大型化することも影響しているのかもしれない。いずれにしても、石室規模・構造の点で一定の規範の基づいて変遷していることを強く窺わせるので、穴薬師(綾織塚)古墳と醍醐3号墳の築造はTK209 型式併行期の時間幅の中でまず間違いないだろう。穴薬師(綾織塚)古墳と醍醐3

号墳の前後関係を確定するのは困難である。石材の大型化の点では醍醐3号墳が後出すると考えられるが、前室区画の変化の点では穴薬師(綾織塚)古墳が後出することになる。現状では、新宮古墳をモデルとしつつ、ほぼ同時期に派生・構築されたと捉えておいた方がよいだろう。その場合には、穴薬師(綾織塚)古墳と醍醐3号墳の築造時期を、TK209 型式併行期の中でも古段階に想定しておくべきであるが、これ以上の追及は困難であるといわざるを得ない。

2. 新宮古墳・穴薬師(綾織塚)古墳・醍醐3号墳、綾北古墳群の評価

新宮古墳、穴薬師(綾織塚)古墳、醍醐3号墳がTK43 型式併行期末葉からTK209 型式併行期にかけて一定の規範の下に築造されたことが想定された。ここでは、墳丘要素や他の小規模横穴式石室墳の様相を加え綾北平野の古墳群の特性を考える。

これら3基の墳丘については、これまで述べてきた通り方墳である。また、穴薬師(綾織塚)古墳に想定した主墳丘以外の低基壇を除いて、一辺が約20mの規模をもつ点においても共通性を有している。確定するためには発掘調査を実施する必要があるが、当該期の綾北平野における上位階層墳において石室規模・構造と墳丘形態・規模がセットとなった一定の規範があったことを窺わせる。また、方墳であることがどの程度意味をもつかという点においては、より広い地域での比較検討が必要であるため、ここでは深く立ち入らない。

当該期の綾北平野では、本書で紹介した仏願1・2号墳やサギノクチ1号墳(井上・玉城1982)など玄室床面積10m²以下の小型の横穴式石室墳が、綾川を介して大別した場合に2群に分かれて分布する。詳細な基数の把握はできていないが、消滅したものもあることを考慮すると総数で50基程度の横穴群となることが予想される。これらは、墳丘・玄室規模からみて、新宮古墳・穴薬師古墳・醍醐3号墳より下位の階層の存在を示していることは明らかであろう。問題は、綾北平野における山ノ神2号墳や醍醐古墳群における醍醐1・2・7号など、新宮古墳・穴薬師(綾織塚)古墳・醍醐3号墳と同じ規模・特徴をもつ大型横穴式石室を内包する上位階層墳が存在していることである。測量調査など詳細を確認しているわけではないが、石室型式からみて、新宮古墳から醍醐3号墳に至るTK209 型式併行期に築造されている可能性は極めて高く、矮小なエリアを対象として短期間に

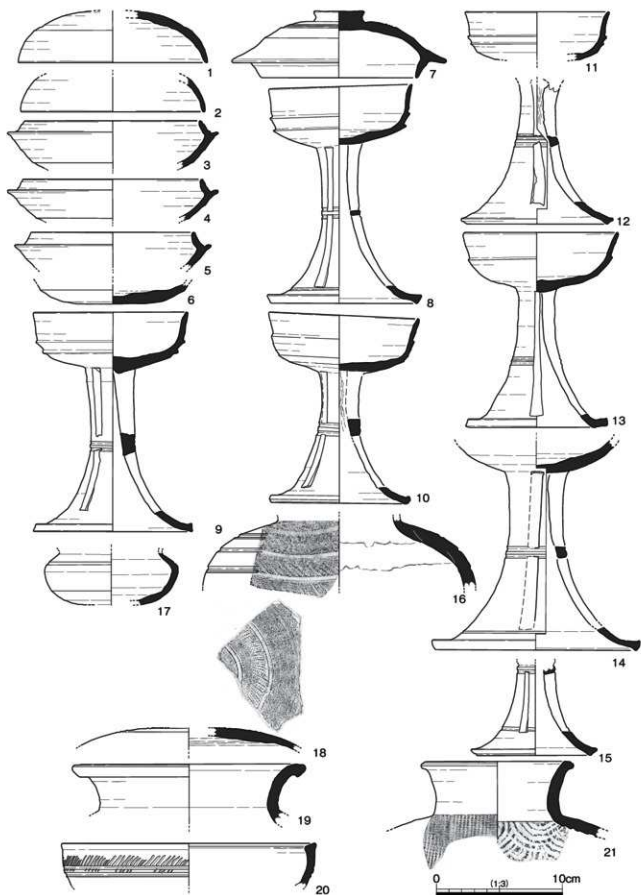


図 30 母神山鐘子塚古墳出土須恵器 1

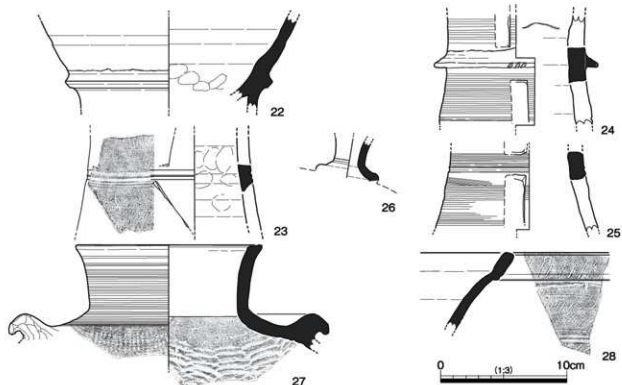


図 31 母神山鏡子塚古墳出土須恵器 2

相次いで大型横穴式石室墳が築造されていることになる。讃岐地域全体で古墳後期から終末期にかけての階層関係は、椀塚古墳→平塚古墳→角塚古墳→果代的な築造が行われ墳丘・石室規模ともに傑出した存在である大野原古墳群を頂点とした、ピラミッド状の構成となっているのは明らかであろう。また、大野原古墳群は、伊予の字塚山古墳や土佐の朝倉古墳など四国島内の大型横穴式石室墳に影響を及ぼす点からみても、絶対的な存在と言える(大久保 2009)。

一方で、綾北平野のような中・小地域での階層構造が問題となろう。本書で検討したように、綾北平野の大型石室墳群が累代的に築造されたものではなく、短期間、同時多発的に築造されたのであれば、ピラミッド的な階層モデルの成立は困難であると考えられる。傑出した大野原古墳群の次のランクの盟主墳の位置付けが綾北平野の巨石墳群の評価に繋がると考えられるため、今後、醍醐古墳群等の資料化を進めた上で更に検討していかねばならない。

また、綾北平野は TK43 型式古段階以前において、盟主墳が存在しない地域であるだけに、盟主層が急速に結集した、または結集させられたような事態も想定できよう。いずれにしても、綾北平野の大型横穴式石室墳の動態は、既存モデルで説明できるようなものでないことは確かである。

現時点では、7 世紀初頭を前後する時期に綾北平野が急速に重要視されたという点を認識しつ

つ、古墳群データの充実を行いつつ、後続する記念物である城山城、そして讃岐国府との歴史的脈絡を追及していくことが重要であると考えられる。

- 井上勝之・玉城一枝 1982「坂出市加茂町木の葉塚(科ノナ1号墳)の縦列壁面」『古代学研究第 92 号』
- 大久保徹也 2009「大野原古墳群の基礎的検討」『山典遷葬記念論集 考古学と地域文化』山典遷葬記念論集刊行会
- 大久保徹也 中島美佳 2009「石ヶ鼻古墳 御鏡天神社古墳」高松市教育委員会
- 川畑油・渡部明夫 2008「坂出市新宮古墳出土須恵器について」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅳ』
- 廣瀬常雄編 1986「醍醐 3 号墳発掘調査報告」香川県教育委員会
- 松本敏三 1985「原始・古代編」『観音寺市誌 通史編』
- 久保田昇三 2008「観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書」観音寺市教育委員会
- 久保田昇三編 2009「香川県指定史跡椀塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会報告書」観音寺市教育委員会
- 川畑油・渡部明夫 2008「坂出市新宮古墳出土須恵器について」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅳ』香川県埋蔵文化財センター
- 香川県埋蔵文化財センター 2010「讃岐国府跡探索事業に伴う調査報告」『香川県埋蔵文化財センター年報平成 21 年度』
- 香川県埋蔵文化財センター 2011「讃岐国府跡探索事業 平成 21・22 年度 地名・地形調査報告」
- 香川県埋蔵文化財センター 2013「讃岐国府跡探索事業調査報告 平成 23・24 年度」
- 坂出市史編纂委員会 1988「坂出市史資料編」
- 山崎信二 1985「横穴式石室構造の地域別比較研究 - 中国・四国編 -」1984 年度文部省科学研究費奨励研究 A 実績報告書

讃岐国府跡探索事業調査報告
平成25年度
新宮古墳・醍醐3号墳の確認調査
2014年2月

編集・発行
香川県埋蔵文化財センター
印刷
ナカハタ印刷株式会社